第２回三条市未来の保育所検討委員会　会議概要

１　日　　時　　令和８年９月 18 日（金）午後３時開会、午後５時閉会

２　場　　所　　三条市役所栄庁舎３階　大会議室

３　出 席 者　　小池委員長、藤波職務代理、徳武委員、丸山委員、捧委員、滝口委員、本田委員、長谷川委員、吉原委員、木菱委員、久田委員、田邊委員、金子（佳）委員、笹川委員、関委員、佐藤（道）委員、渡辺委員、渡邊委員、山田委員、岩渕委員、目黒委員、大谷委員、野田委員、徳間委員、遠間委員、村田委員、栗山委員、髙橋委員、片岡委員、金子（ル）委員、原委員、佐藤（栄）委員

（欠席者：山口委員、小松委員、与斉委員、榎本委員、佐藤（和）委員）

４　職 員 等　　熊倉教育長、平岡教育部長、小林子育て支援課長、川俣子育て支援課長補佐、熊倉所長、石塚所長、佐藤所長、近藤所長、小倉所長、小林所長、涌井所長、松尾所長、小黒所長

５　傍 聴 人　　０　人

６　議　　題

(1) 将来人口及び将来入所児童数の推計について

(2) 保育における集団規模に関するアンケート調査結果について

(3) 第３回以降の検討内容及びスケジュールについて

７　審議の経過及び結果

教育長挨拶

（熊倉教育長）

本日は、大変お忙しい中、第２回三条市未来の保育所検討委員会に御出席をいただいたことに感謝申し上げる。６月に行った第１回の会議では、保護者の立場、地域を代表される立場、あるいは実際に保育に携わっておられる立場から、それぞれ実感のこもった御意見を頂戴することができた。前回の冒頭の滝沢市長の挨拶の中で、少子化という現実を後ろ向きに捉えるのではなく、子どもたちにとってより良い環境をどのように整えていくかということが大事であると申したが、前向きな姿勢で皆様から御協議をいただいたことに心から感謝を申し上げる。保育は、１人１人の子どもに保育者が丁寧に対応して大切に育むと同時に、同年代の子どもたちが共に過ごし、集団で関わり合う中でこそ育まれるものも多くあるかと思う。この集団の規模をどのように考えていくかという点が、この今後の三条市の保育所の在り方を左右する大変重要

な論点である。子どもの数が減っている中で、集団の規模がどのようであるべきかは、簡単には答えが出ないからこそ、それぞれの立場から向き合ってこられた皆様の御意見が欠かせないと考えている。本日の会を、まず、将来の三条市の子ども、幼児の数の見通しを共有した上で、保育現場の保育士の皆様の声を伺うアンケートを実施した結果を基に、望ましい集団規模の在り方について御協議をいただきたい。将来の幼児の数を見据えて初めて、規模の議論も具体的なものになるかと思う。三条市の子どもたちが、幼時期に他と共に協調したり、他を思いやったりするなど、生きる力の基礎を育んでいけるよう、忌憚のない御意見をお願いしたい。

(1) 将来人口及び将来入所児童数の推計について

（小林子育て支援課長）

～資料のとおり～

（山田委員）

三条市立大学や商業施設、駅が近いなど、利便性の高い場所の宅地造成が行われている。これが子どもの数に比例すると考えたときに、この統計は、都市計画を加味した数字なのかをお聞きしたい。ディベロッパーにより計画的に行われる都市計画・都市開発の動きを把握しながら統計を取っていないのであれば、統計に加味するべきであると考える。

（小林子育て支援課長）

今回の推計に関しては、資料１－１の条件設定で推定をしているため、現在の行政や都市開発・都市計画、また社会情勢の変化等については加味していない。条件が変われば当然結果は変わるものと思うが、今回の推計にあたっては、先ほど申し上げた条件のみで推計をさせていただいたので、御理解いただきたい。

（山田委員）

可能であれば、403 号線や旧イオンの跡地など、大きく変わる要因も加味しながら、柔軟に話を進めていただきたい。

（平岡教育部長）

今ほどの山田委員の御意見は、将来推計にあたってはもっともだと考える。ただし、小林子育て支援課長も申し上げたとおり、将来的な開発案というのは一概に言えるものではなく、人口の動きに影響するような大きな開発は、今のところ想定されていない。反対に、推計に加味する方がリスクがあることから、これまでの動きを追って作成したものが手元の資料である。

「１　将来人口推計に関する設定条件」の③は、年齢別人口異動者数を加味している。例えば、子どもが１歳から２歳に上がる際にどのような人口変化があるかということを、それぞれ過去の経過を加味して追ったものである。それほど大きな変動ではないが、市民の行動として、例えば須頃地域のアパートを借りて暮らしていた夫婦が、子どもが生まれた後、嵐南地域等に家を建てるなどといった行動傾向は一定数あるものとして、若干なりともそれを加味して推計した数字となっている。これが推計にあたっての限界かと思うので、御理解いただきたい。

（小池委員長）

まちづくりや地域計画と関係する新しい御意見だったかと思う。とても大事な御意見だとは思いつつ、都市・まちづくりと子どもの育ちは、時間軸が異なるため、今育っている子どもたちの環境をどのように保障していくかについても同時に見ていかなければならないということを念頭に考えていただけるとありがたい。

（徳武委員）

資料１－２の見方を教えていただきたい。例えば、三条嵐南学園では、令和８年度の０歳児が 71 人とあり、これは令和９年になると１歳児となるので、右斜め下に１つ下がって 72 人になる。順に追っていくと、どの学園も同様となっているが、２ページ目の三条おおじま学園だけが異なっている。例えば、令和８年度の０歳児は 45 人であり、右斜め下に下がると 38 人となっており、他の学園区に比べて減りが大きいが、これは設定条件が要因ということか。

（小林子育て支援課長）

御指摘のあった三条おおじま学園だが、０歳から１歳に上がる際に減少しており、他の地区に転出される方が多い地区ということで、設定条件１の③では、これらを全て加味して推計した。

(2) 保育における集団規模に関するアンケート調査結果について

（小林子育て支援課長）

～資料のとおり～

（村田委員）

過去に年長児クラスが６名だったという年を経験している。現在は 12 名から 17 名ほどで推移しているが、その当時の経験としては、やはり日常の活動はかなり制限があると感じた。２歳、３歳の頃であれば、反対に人数が少ないとよいことも多々あるかと思うが、５歳児になって、他者の意見を聞いて自分の意見を伝える、そしてそれがグループ毎に行われるというところに、幼児期、特に年長児の育ちというのは大きな意味があると考えている。当園は姉妹園が石上にあるため、その姉妹園の年長児と毎日のように交流し、グループワーク等ができた。毎日そのような交流がないとすると、やはり難しい部分が出てくるのではないか。他者の意見をきちんと聞いて、自分の意見との折り合いを付ける、自分の家庭以外の価値観があるということを関わりの中で理解することは、５歳児にとって大きな意義があるため、ある一定の集団規模は必要であると感じている。

（小池委員長）

子ども同士が育ち合う環境を保育園の中でどのように確保していくかということは、とても大事な観点である。事務局からも話があった少し気になる子どもについては、配慮は必要だが集団での活動も必要ではないかと思うが、その辺りでお気づきの点があればお聞かせ願いたい。

（藤波職務代理）

職員の数と子どもの数というのはその時々であり、また、過疎地域もあることから、その環境の中で最大限の保育を行うことが大事であると考えている。例えば、縦割りのクラスであれば、大きい子で本当はもっと遊べる子だが、小さい子に合わせていると、少し持て余してしまう。教育ということを考えたときに、年長児の子どもはこれから小学校へ行くのに、赤ちゃんのような遊びをしていてよいのだろうかという点は、保育者が気にすべきことだと思う。子どもの人数は選びようがないが、子どもの育ちを保証していくという面では、年長児が持て余さないように、年少児が放置され

ることのないように、保育者が配慮すべきと感じている。アンケートの数字は、現場で子どもたちと接している職員が、肌感覚として15人くらいなら見守りしやすい、30人までならダイナミックな活動ができるなど、忌憚なく回答しているものである。大事なのは、数字よりもどのような保育を行っていくかということであると考える。

（関委員）

３点質問したい。今回の委員会の意義として、まず市が運営する公立の保育園の在り方を検討するとのことだが、法人が運営している保育園がこの先いくつ残るかが分からないまま、公立の保育園を減らすことを決めてよいのか疑問に思うが、どのように考えているか。

また、腹を割って話をしなければならない段階であると感じているが、各保育園、施設の中で、この20年後の児童数や子どもたちの減り方を見たときに、園の運営が成り立たないと感じている施設があるのかどうかを教えていただきたい。

最後の質問だが、今回の委員会は１か月ほど延期されており、書面には諸般の事情と書かれていたが、理由を教えていただきたい。

（小林子育て支援課長）

公立・私立の在り方ということだが、法律で、市町村の責務として保育を提供しなければいけないということになっている。私立に委託して保育を実施いただいているというのが法的な整理になる。行政側で決定できるのは公立の施設であり、私立については各法人が運営されているため、１つ目の疑問が生じるのだと思う。

まず、公立をいくつ閉所するか、いくつ集約が必要となるかということを、三条市が法人へ示すこととなる。公立が１つ閉所すれば、どこかの施設で受け入れる必要があり、その受入先が公立か私立かについては、保護者が送迎できるかどうかによって変わってくるものであるため、まず初めに公立について決定することが、今回の検討委員会の役割と考えている。

２つ目の質問については、私からお答えしかねる。

３つ目の１か月開催が遅れた理由については、条件をどのようにしたら１番現状に合わせた推計となり、それがどの程度確かであるかを、何パターンか想定をした上で実施するのに時間を要したためである。しっかりとした数字を皆様に示すことができなければ、こういった議論が進まないと考えた。恐らく法人にとっても衝撃的な数字を示していると認識している。子どもの数や施設における子どもの数が減少していく

ことを数字で示すために延期させていただいたことは大変申し訳なかったが、御理解いただきたい。

（関委員）

資料３「第３回以降の検討委員会イメージ」には、第４回検討委員会の検討事項として私立保育園に問題意識（閉園、経営統合など）をお聞きしなければならないが、回答いただける保育園は現段階であるのか。

（小林子育て支援課長）

本日、大体どのくらいの規模感がよいのかという御意見を頂戴した上で、先ほどの先生方へのアンケート結果等も踏まえて検討する。

議題の(3)で説明する予定であったが、先に説明すると、第３回検討委員会は10月下旬から11月上旬を予定しており、保育施設の規模感の案を事務局で考え、提示する予定である。これにより、その規模を満たさない保育所が見えてくるものと考えている。建設年代や人数は第１回検討委員会で示したが、それらに加えて、職員数や気になる子どもの人数を示した上で、本当に閉所してよいのか、閉所するにあたっては、周辺の保育施設にどのような影響があるのかを考え、また、目途となる閉所時期をある程度一定の方向感で検討いただき、第３回で最終的な施設の廃止や集約について示したいと考えている。また、それらを提言としてまとめ、示すことになる。ある程度の人数がいなければ経営ができない点や、複数園、単独園経営の法人がある点は、行政として決定することができないが、そのように促していきたいといった形の提言でまとめたいと考えている。

これについては、閉所する公立保育所によって受ける影響が全く変わってくることから、それが分からない段階では、法人も判断が難しいのではないかと思い、現状ではこのような形で進めていきたいと考えている。

万が一第３回、第４回でまとめきることができなければ、第５回で最終的にとりまとめて、５回ありきではなく、しっかりと議論した上で提言をまとめたいと考えている。もしかすると、回数を増やすような場合も想定しているので、よろしくお願いしたい。

（関委員）

資料１－４、７ページの四つ葉学園でいうと、保内保育所、塚野目保育所の２つ

の公立保育所があるが、これを１つにしなければならないのかどうか、もしくは２つとも閉所しても、ふじの木保育園が受け入れてくれるなら問題ないという意見があるのか、地域の一般の方々や、児童生徒に関わっている保護者の方々にも聞きながら自分の考えを深めていけたらと思う。

（小池委員長）

本日は、市の方でアンケートを取った保育の集団規模を考えながら、その中でどのような保育が展開できるのか、どのような保育が行われているかということを、この場で共有させていただきたい。その上で、今後第３回、第４回と進めて行くので、御了解いただきたい。

蛇足にはなるが、子どもの数が減少しているのは、三条市だけでなく全国的な話である。その中で公立保育所を調整しながら、いかに子どもが育つ環境をみんなで力を合わせて担保していくかということは、どこの自治体も努力してやっているところである。特に私立保育園は、全国で見ると、規模感や運営に関して、様々な工夫をしている園が出てきている。そのような知見が広まっていけば、どのような形で展開していくことができるか、まだまだ可能性があると感じている。しかし、まずは今いる子どもたちの育つ環境を、大人としてどう確保していくのかというところに焦点を当てて、皆様と議論していければと思う。

法人の皆様が、様々な工夫をしてくださっていることは、様々な場所で見聞きしている。そのような活動がどんどん広まっていけば、地域の中で子どもたちの育つ環境が生まれていくし、最初の市長の話にもあったように、そのような好循環が生まれる可能性も十分にある。実際、そのような自治体が出てきていることも事実である。それらを踏まえながら、今の保育現場で、幼児期の子どもたちの育ちをどのように育んでくださっているのか、園の先生方から、自身の園で行っていることをお話しいただけるとありがたく思う。

（目黒委員）

気になるお子さんというところで言うと、例えば現在、年少児が 11 人いるが、11 人中３人が児童発達支援センターにお世話になっている。２歳から持ち上がった担任に、人数が少ないので１人で担当してもらおうと思ったが、本人から無理だと話があり、２人で担当している。子どもが 10 人増えるとして、どのような子どもが増えるかということが問題であり、気になる子どもがこれ以上増えてしまうと、クラス運営

は成り立たないように思う。当園では個人を大事にしているため、個人の気持ちにも寄り添いつつ、おむつが取れていない子が何人もいて、その対応に手がかかると考えると、本当に１クラス 15 人でやっていけるのかという気持ちもある。大勢の中で育つ子どももいるが、気になる子どもは、少人数の中でその子に合わせた対応をしていくことで育っていると感じる。

年中児、年長児に関しても、１人で 30 人を見ること自体は可能だが、１人１人を大事に、かつ子どもが安全に主体性を持って活動できるようにすることは難しいと感じる。話し合いをするにも、大人数だと、話している子ばかりが話しているような形になるが、現在の年長児 15 人という人数であれば、１人１人が自分の意見を言って、それを聞いてみんなで考えることができていると実感している。様々な子どもがいる中で、そのような意見を聞く活動を行うにあたっては、15 人という人数は丁度よいと感じている。

（小池委員長）

１クラス 15 人というのは、基準としては合っているものの、やはり１人で担当する難しさがあり、恐らく複数担任制を採用している園が多いのではないか。複数の先生方が一緒に協力しながら保育ができる環境づくりを工夫されているのではないかと思いながら話を伺っていた。

（大谷委員）

当園は、少子化ではあるが新しく園舎を建て替え、園運営を大事にしている。今の子どもたちは、それがいいとか悪いとかではなくて、手のかかる子が多い。３歳に上がってもおむつを卒業していない子もいて、トイレトレーニングから行うことが当たり前になっている。子どもの人数としては、３歳児は 15 人程度がよいと考えているが、15 人の子どもたちを１人の保育士が見るのは、なかなか大変である。当園では、19 人の３歳児を２人で見ているが、その中には気になる子どもがおり、正直大変だった。

ただ、その集団の中で生活の自立を繰り返し促すことで、衣服の着脱が１人でできるようになったり、食事が食べられなかった子が食べられるようになったりするのは、集団の力なのではないかと思う。現代の保育は子どもの主体性を大事にしており、遊びの中でどのような学びがあるか、小集団の中でその子はどのようなことを思いながら遊んでいて、そしてその遊びをどのように展開して学習につなげていくか、とい

ったところに力を入れるとなると、3歳以上児は15人から20人の集団がよいのではないかと考える。

（野田委員）

三条市のアンケート結果の人数は、当園の人数と同じくらいだと思って見ていた。少し論点が逸れるかもしれないが、我々認定こども園、保育園は連盟があり、集って様々な情報交換をしたり、お互いに悩みを相談し合ったりして、お互いの園がよくなるよう進めているところである。児童福祉施設は、大事な子どもの命を預かる場所であるが、地域貢献の役割も担っていると考えている。今後、三条市の幼児の人数が減少していく中で、子どもを預かって保育するだけでなく、地域へ貢献するために何ができるかということを踏まえた上で検討していく必要があると考える。子どもの数の減少に対しては、数年前から市内の園の皆様が問題意識を持って動いているので、その話題が尽きることはない。

（小池委員長）

保護者の皆様から、理想とする人数や子どもに経験をしてもらいたいことなどをお聞かせいただきたい。

（久田委員）

自分自身が保育園を選ぶときもそうであったし、カフェを運営しているため、お母さん方の声を日常的に耳にするが、子どもの今だけを見たときには、先生方に少人数の中で手厚く関わってもらう方がありがたいし、安心だというのは間違いない。

一方、兄が小学校の先生をしている関係で、その手厚く関わってもらっていた子どもたちが小学校に上がったときにどうかという話を聞くと、保護者間では評判が良かった保育園が、実はその保育園から上がった子は自分の意見をあまり言えなかったり、手を挙げられなかったりする子が多いという先生方の声もあるようだ。親としては、今はやはり手厚い方がよいと思いつつ、子どもを自立した社会人に育て上げるのが親の定めでもあるので、ゆくゆく子どもが社会に出ていくことを考えたときに、自分の意見を勇気を出してきちんと伝えられる経験をする必要があるとも感じている。ただ、そのためには、年少児くらいのときに、自分の意見を伝えてもよいという関係性を先生と築くことが大事だと考えると、適正な保育をしていただいているように思う。

（木菱委員）

本日は、先生方の保育の視点を聞かせていただいて、本当に１人１人を大事にしていただいていると感じ、大変ありがたく思った。長女は 25 人の年長クラスで、４人の先生がいるが、先生も休暇を取られる関係で、それよりも多い人数がいることはないと伺った。我々が子どもの頃は、子ども 16 人に対して先生１人という環境で育ったため、先生にもお休みがあるとはいえ、ほぼ毎日４人の先生がいらっしゃって、沢山関わっていただいていることに感謝している。

また、長男が未満児クラスにいるが、帰りが遅く、なかなかトイレトレーニングもできない中、先生方に手厚く見ていただき、ありがたく感じている。先ほど、現状だと 15 人程度が理想であるという話があったが、小学校に上がると集団の規模が大きくなっていくことを考えたときに、年長児であれば、ある程度の集団規模の中で、強く生きていく力が欲しいと思うと、もう少し人数が多くてもよいのではないかと考える。

（吉原委員）

長男が年中児クラスにおり、９人を１人の先生に見ていただいている。３歳のときに入所したが、他の８人の子は未満児クラスから一緒であったため、初めは少人数の集団の中でも発言しづらいところがあったように思う。ただ、現在年中に上がって先生からお話を伺うと、自分の意見を言えるようになり、また、積極的に自分から誘って遊べるようになったという話を聞くことができ、仲間と一緒に遊んだり活動したりする中で成長していると感じた。

次男は未満児（２歳児）クラスにいるが、おむつが取れていない状態で入所した。トイレトレーニングは２歳の夏が勝負と言われ、今はほぼおむつが取れた状態で過ごしている。子どもが、友達ができていることが自分もできるようになったと言ってくることもある。先生が定期的に声をかけて、トイレトレーニング完了までもう少しというところまで来ており、毎日ありがたく感じている。

人数的には、長男のクラスは少し少ないように思うが、長男の成長の様子を見る限りでは適当であると考えている。次男のクラスは、12 人を２人の先生が付いてくださっているが、細かいところまで見ていただいていると感じている。

（小池委員長）

トイレトレーニングも、親だけでやるより、一緒にやってくれる人がいるという心強さがあると思いながら話を聞いていた。

それぞれの保育現場や保護者の皆様から、子どもにどのような思いでどのような経験をしてほしいといった観点からも御意見をいただいたが、これを受けての発言等があればお願いしたい。

（佐藤（栄）委員）

人数に関する国の基準を教えていただきたい。また、公立保育所の在り方、あるべき方向を教えていただきたい。

（小林子育て支援課長）

職員の配置基準があり、０歳児は子ども３人に対して職員１人、１・２歳児は子ども６人に対して職員１人、３歳児は子ども 15 人に対して職員１人、４・５歳児は子ども 25 人に対して職員１人となっている。１人で保育できる人数の上限は決まっているが、例えば５歳児が１人しかいなくとも保育士は１人必要となる。

公立保育所の在るべき姿について、児童福祉法という法律の規定で、市町村の責務として、保育を必要とする方の保育を市が実施することになっており、その施設は、行政が運営する公立か、市が委託した法人が運営する私立かとなる。子どもの数が減少していく中で、今９つある保育所の全てを維持、継続していくことは限りなく不可能であると考えているため、公立保育所の数をいくつにするか（他の保育園で受け入れられるところがあれば、その公立保育所を継続するか否か）ということを、今回の検討委員会である程度議論できればと考えている。

また、公立保育所の役割としては、障がい児保育の拠点や行政機関としての位置付けと整理している。この点については、今後も変更の予定はないが、三条市全体で保育所がいくつ必要なのかということを、在るべき姿として検討を進めていきたいと考えているので、よろしくお願いしたい。

（佐藤（栄）委員）

第３回検討委員会では、赤、黄、黒と色分けをするということか。

（小林子育て支援課長）

本日、保護者の皆様から手厚く保育を実施いただいていることや、１クラスあたり

の子どもの人数がある程度必要ではという御意見があった。保育者である法人の皆様からは、ある程度の人数がいた方が、子どもたちの活動がより充実するというお話もいただいた。第３回検討委員会では、これらの御意見を踏まえ、在るべき集団の規模の案を提示させていただく。人数が決まれば、おのずとどの保育所がその数を下回るかが見えてくるため、周辺施設で受け入れ可能かどうかなどを議論いただきたいと考えている。

（田邊委員）

４つ考えていることがある。

１つ目：少子化という現状において、保育施設の統合を検討していくが、保育士を十分に確保していただきたい。

２つ目：保育現場で、保育士と保護者がそれぞれよく話し合いをして、折り合いをつけて進めていただきたい。

３つ目：保育施設の築年数が 40 年を超えるところが多いため、子どもの安全を考える上で、築年数を考慮していただきたい。

４つ目：これが１番大切だと考えているが、三条市内の全ての保育施設の横のつながりを大切にしてほしい。

（小林子育て支援課長）

保育を実施するにあたり、保育士の確保は最重要課題であると考えているため、今後も保育士の確保に努める。

このような検討の場を設け、様々な方の御意見をいただきながら、一定の方向感を出していきたいと考えている。

築年数は、当然考慮すべきものと考えている。施設の外観写真など、他にも必要と思われるような資料があれば、第３回目検討委員会で提供する。

三条市幼児教育推進プランの中に、幼保小連携の取組を掲げており、各小学校区単位での交流活動を行っている。このような取組を今後も継続し、横のつながりを更に作っていきたいと考えている。

（田邊委員）

４つ目については、交流活動ではなく、保育士同士の横のつながりという意味で発言した。全ての保育所の保育士の横のつながりがあれば、どの保育園がよいというよ

うな話は保護者から出ないのではないか。ぜひ保育士同士で横のつながりを深めていただきたい。

（小林子育て支援課長）

公立の話にはなるが、公立保育所の保育士は、年齢毎に部会を作ったり、クラス担任が集まる機会を設け、様々な研鑽を行っている。また、常日頃から私立保育園の保育士との合同研修会も開催している。保育士同士のつながりを深められるような機会を今後も充実させていく。

（関委員）

第３回検討委員会では、どの園を廃止にするかを検討しなければならない。本日、各保育所の保護者の代表の方が８名おられるが、今通っている保育所がなくなると困るという方は率直に挙手願う。他の地区については、その園がないと困るのかどうかが分からないため、御教示いただきたい。

（小池委員長）

要望としては承知した。事務局の方で引き取り、考えさせていただく。本日来られている委員は、たしかに代表ではあるが、意見を述べたり挙手したりすることは、重い責任を伴うため、負担が大きいように感じる。

(3) 第３回以降の検討内容及びスケジュールについて

（小林子育て支援課長）

次回の第３回検討委員会は、10 月下旬から 11 月上旬で日程調整を行っているところである。日程が決まり次第、案内する。